

戦前日本の専門的指揮法の学習経路の特徴と歴史

－日本で活躍した指揮者の履歴に着目して－

石原 慎 司

Aspects and history of orchestral conducting inheritance routes in Japan before WWII: Focus on the conductor's career

ISHIHARA, Shinji

Abstract

It is known that by 1945 there was a place for advanced orchestral conducting studies in Japan. However, in the mid-19th century, immediately after the opening of country to the outside world, the only way to learn was watching foreign military band leaders conduct. How did the learning of conducting develop thereafter? Therefore, I collected historical information on conductors who were active in pre-war Japan and elucidated the paths of learning conducting. Leaders changed in the order of foreign military band directors and string players, followed by the top conductors who had fled Europe due to the international circumstances of the time and came to Japan as orchestra conductor and conducting instructor. As a result, Japanese aspiring conductors were able to learn advanced conducting techniques in Japan without having to study abroad.

Key Words: orchestral conducting history, western music acceptance, Josef Rosenstock, Takashi Asahina, Hidemaro Konoe

はじめに

明治維新前後から始まる洋楽受容において、指揮は外国人軍楽指揮者によってもたらされた。そして、そこを起点として今日までの日本人指揮者の系譜が続いているのであろう。しかしここで不明な点は、戦前の昭和時代までには高度なオーケストラ指揮法教育の場が日本にあったことが判明しているのに（石原 2021）、明治初頭以降どのような経過を辿ってそのような状況にまで到達したのかについてはほとんど情報がないということである。

そこで本稿では戦前の日本人指揮者の学習の場や機会がどのような歴史的経緯で発展してきたのかについて明らかにしたい。そのため、まずは日本人に指揮を教えた（影響を与えた）記録のある在日外国人指揮者/指導者、および、日本人の主要な職業指揮者（自作曲中心曲目の指揮のみ、ないしは、単発の客演業績しかない人物は除外）の指揮に関わる履歴情報を収集し、日本人への指揮の伝承と継承が主に行われたと考えられる場毎に各人をグループ化する。次に、日本の指揮法受容史にとっての重要事績が生じた指揮者順に各人の履歴を提示する。ここでいう重要事績とは、外国人指揮者の場合は指揮を業務に含む日本のポストに着任した年ないしは日本の職業

的なオーケストラを指揮した年とする。日本人指揮者の場合は国内外を問わず職業的なオーケストラへの着任年ないしは指揮した年とする。ただし、明治時代には恒常的な活動や運営がなされた職業的なオーケストラはまだなかったことから、明治期については軍楽や東京音楽学校の合奏、合唱等を業務の一環として指揮をした事績も含めることにする。なお、各グループの時系列の記載は3つの時期（明治時代、大正時代、戦前の昭和時代）に区切って提示する。以上の情報に基づき、各時代の指揮学習経路の特徴を検討し、戦前の日本人指揮者がどのような機会を捉えて指揮を学び、専門的なオーケストラ指揮法を獲得していったのかについての歴史的な流れを考察する。

1 明治初期の指揮者

明治時代の指揮の主要な学習先は「陸軍軍楽隊」「海軍軍楽隊」「東京音楽学校」である。これら各グループ毎にそこで教えた外国人指揮者/指導者およびそこで学んで指揮者になった日本人指揮者の履歴を確認する。

1.1 陸軍軍楽隊の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1872（明治5）年、ダグロン（Dagron, Gustave

Charles 1845 フランス -1898?), 陸軍軍楽隊創設時の備教師(堀内 1968 : 21)。1873 (明治 6) 年鎌倉天覧演習で陸軍軍楽隊を指揮(武内 1995 : 236)。1882 (明治 15) 年解雇。履歴: フランス軍楽隊 4 等楽士(武内 1995 : 235)。

② 1876 (明治 9) 年, 小篠秀一軍楽長 (?-1905), 軍楽隊初の民間への出張演奏を指揮。1879 (明治 12) 年設立の洋楽協会幹事(堀内 1968 : 22-27)。1878 (明治 11) 年宮内省着任。学習履歴: ダグロン指導下にいた。その後エッケルト, メーソンから学ぶ(堀内 1968 : 26-27)。

③ 1881 (明治 14) 年, 四元義豊楽長 (1852-1901), ダグロンと共に横浜山手公園奏楽を指揮(三浦 1931 : 169-171)。1883 (明治 16) 年鹿鳴館開館に始まる舞踏会で陸軍軍楽隊を指揮(大森 1986 : 51)。1887 年日本音楽会幹事となり(秋山 1966 : 31), 指揮も行う(堀内 1968 : 44, 75)。学習履歴: ダグロン指導下にいた。

④ 1884 (明治 17) 年 11 月, ルルー (Leroux, Charles 1851 フランス -1926 フランス), 陸軍軍楽隊雇教師となる。ルルーはパリ音楽院に学んだフランス陸軍楽長で(塚原 2001 : 95), 1887 年日本音楽会幹事となり(秋山 1966 : 31), 1889 (明治 22) 年帰国(堀内 1968 : 56)。

⑤ 1888 (明治 19) 年 7 月, 工藤貞次楽長 (1860-1927), 日本音楽会で指揮(堀内 1968 : 75)。学習履歴: ダグロン指導下の四元義豊楽長配下の楽手(三浦 1931 : 171)。1922 (明治 15) 年陸軍通訳官古矢弘政と共にパリに留学し(堀内 1968 : 56), 1884 (明治 17) 年 11 月パリ音楽院入学許可(塚原 2022)。1888 (明治 19) 年帰国し二等軍楽長となる(三浦 1931 : 174)。

⑥ 1905 (明治 38) 年 8 月, 永井健子 (1865-1940), 陸軍戸山学校教官として第一回日比谷公園奏楽で指揮。1906 (明治 39) 年同校校長(細川他 2008 : 460, 堀内 1968 : 115)。退役後 1925 (大正 4) 年東京音楽学校講師。帝国劇場洋楽部長として指揮もした(堀内 1968 : 133-134, 細川他 2008 : 460)。学習履歴: ダグロン, ルルー指導下にいた。1903 (明治 36) 年にフランスの軍楽隊に留学。

1.2 海軍軍楽隊の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1869 (明治 2) 年, フェントン (Fenton, John William 1828 アイルランド - ?), 陸軍軍楽隊を指導(堀内 1968 : 16)。1870 (明治 3) 年自作の初代〈君が代〉を明治天皇の閲兵式で指揮(堀内 1968 : 18)。1871 (明治 4) 年日本海軍水平本部楽隊教師。1876 (明治 9) 年宮内省兼務。1877 年 3 月末解雇(武内 1995 : 354-355)。履歴: 軍楽隊内のみの教育によるイギリス軍軍楽隊長。

② 1871 (明治 4) 年 9 月, 中村祐庸 (1853-1825), フェントン着任時の海軍軍楽隊初代楽隊長となる(堀内 1968 : 20, 44)。1883 (明治 16) 年以降(時期は不明)の鹿鳴館開館後の舞踏会で海軍軍楽隊を指揮(大森 1986 : 51)。1887 (明治 20) 年日本音楽会幹事(秋山 1966 : 31)。学習履歴: フェントン指導下の軍楽隊長(堀内 1968 : 20)。

③ 1879 (明治 12) 年 4 月, エッケルト (Eckert, Franz 1852 年ドイツ -1916 朝鮮), 海軍軍楽隊雇教師となる(堀内 1968 : 26)。1883 (明治 16) 年から 1886 (明治 19) 年まで宮内省雅楽課教師を兼務。1888 (明治 21) 年海軍退職, 宮内省雅楽課教師。1892 (明治 25) 年から 1894 (明治 27) 年まで陸軍軍楽隊教師兼務。1897 (明治 30) 年から 1899 (明治 32) 年まで再度海軍軍楽隊教師兼務。1900 (明治 33) 年宮内省辞職(堀内 1968 : 45)。履歴: プレスラウとドレスデンの音楽学校卒業。ドイツ海軍楽長を経て来日。1886 (明治 19) 年新設の日本音楽会幹事となり指揮する。1894 (明治 27) 年《ファウスト》(部分)を東京音楽学校で指揮(堀内 1968 : 75, 79, 秋山 1966 : 31)。

④ 1884 (明治 17) 年, 伶人の芝葛鎮 (1849-1918), 鹿鳴館の舞踏会で指揮(堀内 1968 : 61-62)。学習履歴: 1874 (明治 7) 年末より海軍中村祐庸から, 1876 (明治 9) 年以降はエッケルトから吹奏楽を学ぶ(堀内 1968 : 26)。

⑤ 1885 (明治 18) 年, 伶人の上真行 (1851-1937), 音楽取調所卒業演習会で唱歌等を指揮(東京藝術大学百年史編集委員会 1987 : 220)。学習履歴: 上記芝と同様。

⑥ 1905 (明治 38) 年, 吉本光蔵楽長 (1868-1907), 第二回日比谷公園奏楽からで東京派遣横須賀海兵団海軍軍楽隊を指揮(堀内 1968 : 116)。学習履歴: 1878 (明治 11) 年海軍軍楽隊に入隊しエッケルトの指導下にいた。1899 (明治 32) 年ベルリン音楽院に留学して指揮も学ぶ。1902 年帰国し海軍軍楽長となる(塚原他 2011)。

⑦ 1909 (明治 42) 年, 久松鉦太郎, 新設の日本橋・三越少年音楽隊楽長となる。1913 (大正 2) 年オーケストラ化して 1915 (大正 4) 年日比谷公園奏楽を指揮(玉川 2007 : 84, 堀内 1968 : 162)。学習履歴: 明治 17 年海軍軍楽隊入隊(大森 1986 : 90), エッケルト指導下にいた。

1.3 音楽取調掛(東音)の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1880 (明治 13) 年, メーソン (Mason, Luther Whiting 1818 アメリカ -1896 アメリカ), 音楽取調掛雇教師および宮内省雅楽課兼務となり弦楽と管弦楽を指導(上原 1988 : 281)。1882 (明治 15) 年音楽取調の成績

報告「大演習」で「洋風管絃楽二曲」を指揮（伊澤 1971：32）。（明治15）年解雇。履歴：ボストンの音楽学校監督（堀内 1968：46）。

② 1886（明治19）年4月、ソーブレット（Sauvlet, Guillaume 1843 オランダ-1902 アメリカ）、音楽取調掛備教師となる。1887（明治20）年卒業式並演奏会で日本初の交響曲演奏（ベートーヴェン1番）を指揮（堀内 1968：53）。同年日本音楽会幹事となる（秋山 1966：31）。1889（明治22）年1月解雇。履歴：マスコット歌劇団、メルヴィル歌劇団の指揮者兼伴奏者（東京藝術大学未来創造継承センター大学史資料室 2020, 中村 1993：664-667）。

③ 1899（明治32）年、ユンケル（Junker, August 1870 ドイツ-1944 日本）、東京音楽学校雇外国人教師となる。1909（明治42）年9月から2年後に開場する帝国劇場洋楽隊の指導をヴェルクマイスターと共に東洋音楽学校を会場に開始（三浦 1931：558, 堀内 1968：123）。1910（明治43）年4月には新設の東京フィルハーモニー会管弦楽部の貸費生指導も同会場で行う（武石 2007：126-127）。1912（明治45）年3月末東京音楽学校退職。1934年（昭和9）年再来日し武蔵野音楽学校で教え（東京藝術大学百年史編集委員会 1987：534）、1935（昭和10）年名古屋交響楽団を指揮（長谷他 2021：53）。1939（昭和14）年松竹交響管弦楽団の専任指揮者となる（大森 1986：255）。履歴：ケルン音楽院卒。ヴァイオリンの大家ヨアヒムの推選学生。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等の首席ヴァイオリン奏者を経て1891年常任指揮者ニキシュ下のボストン交響楽団首席奏者となる（東京藝術大学百年史編集委員会 1987：532-533）。

④ 1907（明治40）年12月、ヴェルクマイスター（Werkmeister, Heinrich 1883 ドイツ-1936 日本）、東京音楽学校講師嘱託となり、ユンケルやクロンを助けて管弦楽員の養成に加え、海軍々楽隊依託生の指導にも当たる（東京藝術大学百年史編集委員会 2003：1209, 1213）。1909（明治42）年9月から2年後に開場する帝国劇場洋楽隊の指導をユンケルと共に東洋音楽学校を会場に開始（三浦 1931：558, 堀内 1968：123）。1910（明治43）年4月新設の東京フィルハーモニー会管弦楽部の貸費生指導も同会場で行う（武石 2007：126-127）。1921（大正10）年12月末東京音楽学校退任帰国。1923（大正12）年再来日して東京高等音楽院や東洋音楽学校の教員となる。1931（昭和6）年東京音楽学校教務嘱託（東京藝術大学百年史編集委員会 2003：1209）。1925（大正14）年新設大阪フィルハーモニックオーケストラ（JOBK 管弦楽団）を指揮（杉本 2019：9, 徳永 1999：71）。履歴：1907年ベルリン王立高等音楽学校卒業後、

ベルリン音楽院で教鞭をとりつつチェロ奏者としても活躍。

⑤ 1908（明治41）年11月、瀬戸口藤吉楽長（1866-1941）、日比谷公園奏楽にて東京派遣海軍軍楽隊を指揮。1904（明治37）年海軍軍楽長（林 2018）。1910（明治43）年東京フィルハーモニー会管弦楽部が機能していなかった第3回演奏会で海軍軍楽隊オーケストラを指揮。1927（昭和2）年放送歌劇で《蝶々夫人》を指揮（堀内 1968：127, 222）。学習履歴：1882（明治15）年エックケルト指導下の海軍軍楽隊に入隊。1908（明治41）年海軍軍楽隊東京派遣所を設置して東京音楽学校委託学生として弦楽器を習う楽手14名を連れて通学して自身はユンケルから管弦楽指揮を習う（堀内 1968：118）。

⑥ 1911（明治44）年、竹内平吉（1887-1972年）、新設の帝国劇場洋楽部の楽長となり（日外アソシエーツ 2004：1503）、ヴェルクマイスター作曲の歌舞曲《胡蝶の舞》を指揮（堀内 1968：136）。1911（明治44）年帝劇で軽歌劇舞台監督兼舞踏振付師ローシー（Rosi, Giovanni Vittorie 1867 イタリア-?）下でオペラ制作を開始し、1913（大正2）年に《ヘンゼルとグレーテル》（和名『夜の森』）を指揮（堀内 1968：148-149）。1914（大正3）年ローシーの新設ローヤル館の指揮者を経て（堀内 1968：151-152）、その後複数のいわゆる浅草オペラの指揮者を遍歴。1919（大正8）年新設松竹専属新星歌劇団、1921（大正10）年新設生駒歌劇団など（増井 1984：383, 402）。1917（大正6）年ハイドンの交響曲第104番日本初演で羽衣交響楽団を指揮（九州大学広報室 2018）。1933（昭和8）年宝塚交響楽団を指揮（根岸 1998：11）。学習履歴：1910（明治43）年ユンケルやヴェルクマイスター在任中の東京音楽学校を卒業。同年東京フィルハーモニー会管弦楽部「貸費生」へのチェロ指導をユンケルやヴェルクマイスターらと共に進行（武石 2007：126-127）。

1.4 明治時代における日本人指揮者の指揮学習の特徴

明治初年の日本は外国軍楽隊経験者のダグロンやフェントンを雇って軍楽隊創設時の指導をさせた。しかし、彼らは軍楽でのみ音楽を学んだ人たちであり、音楽学校等で専門教育を受けてはおらず、オーケストラの指揮にも縁のない人材であった。ゆえに、20世紀以降の職業オーケストラ指揮者のような高度な指揮ではなかった可能性が高い。このような指導者の着任と同時に楽長を拝命して指導法（指揮法）を学んだのが海軍の中村である（言及しなかったが陸軍では西謙蔵）。そして、この軍楽隊創設現場で初期的な習練を受けて順次楽長に昇進していったのが小篠、四元である。このあたりまでが音楽の専門教育を受けていない外国人指導者に養成された軍楽

長たちであり、日本人指揮者のいわば「第一期」である。なお、この時期の楽長たちの指揮レベルは低いもので、四元らについては「曲を終了したのちもまだタクトをふっていました」との報告がある（中村 1993：566）。

次の「第2期」といえる明治中頃になってもオーケストラの職業指揮者から学んだ日本人はいないのであるが、指揮学習環境として改善してきた点は、音楽の専門教育を受けた軍楽長ルーやエッケルト、音楽教育家メーソンが招聘されたことである。上記のような指導者の下で育成された日本人指揮者として、軍楽長では永井健子や久松鋳太郎、宮内省では芝葛鎮や上真行がいた。なお第一期で軍楽長となった小篠秀一も宮内省への異動後の第二期の学習先で芝らと共に学び続けて鹿鳴館で指揮するようになったのである。さらにこの時期には派遣留学でパリ音楽院に学び軍楽長となった工藤貞次もいる。なお、第2期においても、日本人指揮者は職業指揮者から指導を受けたわけではなく、その指揮技能は第1期の状況とさほど変わらなかった可能性がある。

1886（明治19）年11月に退役軍楽隊員を中心に設立された東京市中音楽会（初の民間吹奏楽営利団体）では、指揮者の指揮技能、音楽的能力を一切考慮することなく決めている。具体的には、楽長を西洋人にしようとするあまり、当初はチャリネ曲馬団楽士ジョージに依頼するも、当人は楽譜が読めないために1か月で逃げ出し、さらにその後は米国軍艦マナカッシー号乗り組みのイタリア人信号兵リゼットを楽長とする始末であった（塚原 2001：109, 堀内 1968：64-66）。この楽長人事が示唆している点は、軍楽経験者であるにも関わらず指揮の重要性を全く理解していなかった、つまり、レベルの低い指揮しか見たことがなかった状態であったということが考えられる。

明治後期の状況は以前に比して好転する。東京音楽学校の雇外国人教師によって「オーケストラ指揮」を学び得る環境が生じてきたのである。ユンケルのように一流の楽器奏者ながらもオーケストラ指揮を行うようになった外国人が東京音楽学校に着任したり、あるいは、留学先の音楽院で指揮法授業を受けてオーケストラ指揮ができる日本人も出てくるようになってきたからである。この時期に弦楽器を含む編成の軍楽長になったのが吉本光蔵と瀬戸口藤吉で、軽歌劇や少女歌劇の指揮者になったのが竹内平吉である。

2 大正時代の指揮者

大正時代の指揮の主要な学習先は「東京音楽学校」「東洋音楽学校」「海軍軍楽隊」「在日外国人指揮者」である。これら各グループ毎に第1章と同様に履歴を確認する。

2.1 東京音楽学校の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1914（大正3）年、山田耕筰（1886-1965）、東京フィルハーモニー会「恤兵音楽会」で自作管弦楽曲を帝国劇場で指揮。1917（大正6）自作発表でニューヨーク・シンフォニーとニューヨーク・フィルハーモニー合同オーケストラをカーネギーホールで指揮（堀内 1968：163）。1920（大正9）年末「帝国劇場歌劇公演」（複数作品の部分上演）を指揮（後藤 2014：280）。1924（大正13）年日本交響楽協会を組織し指揮者となり、その後国内で誕生する主要オーケストラを指揮。1937（昭和12）年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮（ラジオ放送）（柴田他 1995d：529）。なお、山田の指揮者デビューは1909（明治42）年自作の歌劇《誓の星》だが管弦楽は職業的団体ではない（堀内 1968：135）。**学習履歴**：ユンケルとヴェルクマイスター在任中の東京音楽学校を1907（明治40）年卒業し研究科に進む。1910（明治43）年にベルリン王立アカデミー高等音楽院入学（柴田他 1995c：528c）。

② 1913（大正13）年、クローン（Kron, Gustav 1874 ドイツ-?）、東京音楽学校雇外国人教師（ニキシユ推薦のユンケル後任）となる。着任年ベートーヴェンの第九交響曲を指揮。在職中にベートーヴェン作品多数を本邦初演。1925（大正14）年退職。**履歴**：1892年ドレスデンの王立音楽院に学び、1896～98年ハンブルク楽友協会ソリスト兼カペルマイスター。1900年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のソリストとなり指揮者ニキシユと共に欧州演奏旅行（東京藝術大学百年史編集委員会 2003：1222）。

③ 1914（大正3）年、高木和夫、宝塚少女歌劇団指揮者となる。1929（昭和4）年宝塚交響楽団を指揮。**学習履歴**：東京音楽学校中退後留学しミラノ音楽院教授ピントルノに師事。帰国後1914（大正3）年から宝塚少女歌劇団で指揮する（細川他 2008：384, 根岸 1998：10）。

④ 1923（大正12）年、須藤五郎（1897-1988）、宝塚歌劇団作曲・指揮担当となる。1936（昭和11）年宝塚交響楽団を指揮。**学習履歴**：クローン在任中の東京音楽学校を1919（大正8）年卒業。その後東洋音楽学校教授となる。（近代日本社会運動史人物大事典編集委員会 1997：75, 根岸 1998：11）

⑤ 1924（大正13）年、近衛秀麿（1898-1973）、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮。1933年、1934年、1938年4月、12月、1940年にも同楽団を指揮。1924（大正13）年帰国後、新設の近衛交響楽団や日本交響楽協会で指揮。1926（大正15）年新交響楽団の指揮者。1936年BBC交響楽団を指揮。1937年NBC交響楽団を指揮（日米同時放送）。同年トスカニーニから

ニューヨーク・フィルの副指揮者に指名（大野 2006：413）。1939年ベルリン・フォルクスオーパーで《魔笛》指揮。1940年ウィーン交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団を指揮（藤田 2014：資料 4-6）。1941年シベリウスの招待でフィンランド交響楽団を指揮（大野 2006：413）。**学習履歴**：1919（大正 8）年「〈赤い鳥〉音楽会」（山田耕筰帰朝歓迎会）で《ニュルンベルクのマイスタージンガー》前奏曲を帝国劇場で指揮（大野 2006：90）。1913年東京音楽学校別科（御茶ノ水分教場）入学するも上野本校に来て勝手にクローン指揮下のオーケストラや教員室に入り浸って学んだ。1916（大正 5）年山田耕筰の門下となる。1918（大正 7）年か翌年瀬戸口藤吉を指揮者とする東京アマチュア・オーケストラ・ソサエティーの練習時に指揮を試みる。1919（大正 8）年 6 月帝国劇場の「〈赤い鳥〉音楽会」（山田耕筰帰朝歓迎会）で《ニュルンベルクのマイスタージンガー》前奏曲のみ指揮。1920（大正 9）年帝劇の歌劇公演（ドビュッシー《帰れる児》他）の合唱指揮を山田耕筰指揮下で担当。1922年東京帝国大学管弦楽団を指揮。1923（大正 12）年ドイツのシュテルン音楽院で作曲や指揮法を学ぶ。1930（昭和 5）年渡欧時にはフルトヴェングラーからパート譜を借りて写譜したり、フルトヴェングラーやクレンペラーのリハーサルを見学し、E・クライバーの友人となって親しく学ぶ（大野 2006：195-203）。

⑥ 1926（大正 15）年、ラウトルupp（Lautrup, Chales 1894 オランダ -?）、東京音楽学校雇外国人教師となり（クローンの後任）、東京音楽学校管弦楽団を 1931（昭和 6）年まで指揮。1927（昭和 2）年以降新交響楽団を複数回指揮。**履歴**；コペンハーゲン大学でピアノ、ベルリンのシュテルン音楽院で C. シュレーダーに指揮法等を師事。1923 年デンマーク宮廷歌劇場長（東京藝術大学百年史編集委員会 2003：1226-1228, NHK 交響楽団 2014）。

2.2 東洋音楽学校の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1916（大正 5）年、篠原正雄（1894-1981）、ローヤル館指揮者（島田晴誉の後任）となる（堀内 1968：152）。1922（大正 11）年から翌年にかけて《アイダ》や《カルメン》その他本格的なオペラの和訳ものの原曲による部分上演を指揮（堀内 1968:173）。1934（昭和 9）年新交響楽団を指揮。ローヤル館の他、原信子歌劇団、藤原歌劇団などで日本人が初演する歌劇の多くを指揮。1936（昭和 11）年三浦環の《蝶々夫人》2001 回公演を指揮（細川 他 2008：335, NHK 交響楽団 2014）。**学習履歴**：1912（明治 45）年東洋音楽学校本科卒業。ユンケル、ヴェルクマイスター、大塚淳から学んだ東京フィルハーモニー会管弦楽部第 2 ヴァイオリン奏者（武

石 2007：127）。

② 1921（大正 10）年、波多野福太郎（1890-1974）・録次郎兄弟、ハタノ・オーケストラを指揮（武石 2006：367）。録次郎は 1924（大正 13）年帝国ホテル・サロン・オーケストラ楽長となる（武石 2022：4）。**学習履歴**：福太郎は 1911（明治 44）年東洋音楽学校第 2 回生として卒業（内田 1976：371）。同校でヴァイオリンをユンケルに師事。チェロをヴェルクマイスター、ホルネットを西郷直袈裟に習う。1912（大正元）年から 8 年間アメリカ航路の客船で演奏。その後、弟の録次郎とともに日響の母体となるセミクラシックのハタノ・オーケストラを結成。一方、録次郎も東洋音楽学校卒業と同時に船のバンドに参加。1922（大正 11）年東京シンフォニー、1925（大正 14）年日本交響楽協会、1926（大正 15）年新響の各創立時に奏者として参加（日外アソシエーツ 1998：548）。

③ 1921（大正 10）年以降、奥山貞吉（1887-1956）、浅草オペラの金竜館楽長となる（日外アソシエーツ 1998：118）。1927（昭和 2）年放送歌劇《軍艦ピナフォア》を指揮（堀内 1968：223）。翌年同曲を新交響楽団で指揮（NHK 交響楽団 2014）。**学習履歴**：東洋音楽学校卒業。ユンケルやヴェルクマイスターらの指導を受けた東京フィルハーモニー会管弦楽部第 2 回卒業生（武石 2007：127）。大正時代は外国航路のバンド団員（外国航路）として活躍（日外アソシエーツ 1998：118）。

2.3 海軍軍楽隊の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1916（大正 5）年 7 月、島田晴誉、海軍楽長を辞してローヤル館の指揮者となる（堀内 1968：152, 三浦 1931:567）。1917（大正 6）年ローヤル館楽長。1918（大正 7）年浅草吾妻座幕間奏楽の楽長を経て 1929（大正 9）年松竹映画館網音楽部総長（堀内 1968：162）。以降松竹合奏団や松竹管弦楽団を指揮したレコード多数あり（国会図書館所蔵）。**学習履歴**：東京音楽学校のオーケストラへの演奏協力下にあった海軍軍楽隊（堀内 1968：118, 東京藝術大学百年史編集委員会 2003：1494）。

② 1925（大正 14）年、坂西久治（輝信）楽長（?-1985）、海軍シンフォニー・オーケストラで《新世界交響曲》を指揮（ラジオ放送）（堀内 1968:182）。1935（昭和 10）年新交響楽団を指揮（NHK 交響楽団 2014）。1943（昭和 18）年前後に満州の新京音楽院の指揮者となる（岩野 1999:230）。**学習履歴**：東京音楽学校のオーケストラへの演奏協力下にあった海軍軍楽隊（出典は島田と同じ）。

③ 1926（大正 15）年、早川弥左衛門（1886-1949）、海軍軍楽隊楽長を辞して名古屋松坂屋少年音楽隊の楽長となる。その後オーケストラ化した同団を指揮。1929（昭

和4)年同団は名古屋松坂屋少年交響楽団(長谷他2021:44),1932(昭和7)年名古屋交響楽団(堀内1968:220),1928(昭和13)年東京に移り中央交響楽団,東京交響楽団と改称する中で指揮した(日外アソシエーツ1998:468)。学習履歴:明治36年海軍軍楽隊に入隊。1908(明治41)年から依託学生として東京音楽学校でユンケルから弦楽器または指揮の指導を受けた(長谷他2021:53)。1910(明治43)年第一艦隊軍楽長。

2.4 在日外国人指揮者の伝承・継承系統にいる指揮者

①1923(大正12)年,ラスカ(Laska, Joseph 1886 オーストリア-1964 オーストリア),宝塚音楽歌劇学校教授となり宝塚交響楽団を指揮(皆川2004:85)。1928(昭和3)年神戸女学院教授にもなり理論や管弦楽を担当。1935(昭和10)年離日(堀内2011:57)。履歴:1907年ミュンヘン王立音楽院に学び1909年以降ドイツやチェコ等各地でカペルマイスターとなる。1914年兵役につきロシア側の捕虜,作曲教師を経て来日(Fastl 2022)。

②1925(大正14)年,ケーニヒ(König, Joseph 1874 チェコ-1932 満州),JOAK 嘱託および日本交響楽協会の指揮者となる。1927(昭和2)年新交響楽団指揮者。1929(昭和4)年ハルピンに戻り1932(昭和7)年に当地で没す。履歴:プラハ音楽院で学び,17歳からウィーン他北欧含む各地の交響楽団奏者を経てレニングラード国立マリンスキー劇場の首席ヴァイオリン兼バレエ指揮者。パイロイト祭にも参加。ロシア革命後1917(大正6)年ハルピンの中東鉄道交響楽団奏者。1925(大正14)年日露交歓交響管絃楽演奏会に来日(堀内1968:219,野原2022:104,上原1988:291,武内1995:133)。

③1926(大正15)年,メッテル(Metter, Emmanuel Leonievich 1878 ウクライナ-1941 アメリカ),大阪フィルハーモニックオーケストラ(JOBK 管弦楽団)を指揮(岡野1995:32-33,西村2015:10)。同年京都帝大を中心に組織された学生オーケストラの指揮者となる(堀内1968:176,岡野1995:61)。1930(昭和5)年新交響楽団を指揮。1937(昭和12)年宝塚交響楽団,1939(昭和14)年大阪放送交響楽団(大阪放送管弦楽団,BKオーケストラ)の指揮者となる(西村2015:13,杉本2019:9,NHK交響楽団2014,徳永1999:71)。履歴:ペテルブルグ音楽院に学びロシア各地で指揮した後,1918年ハルピンの中東鉄道交響楽団の指揮者となる(野原2022:94,104)。

2.5 大正時代における日本人指揮者の指揮学習の特徴

大正時代のオーケストラ指揮に関わる学習先の特徴は,時期的な面では明治時代後半以降の「第3期」の特

徴,つまり,在日外国人演奏家ないしは留学先の指揮法授業等から学びうる状況が継続していた。具体的な学習先としては明治に続いて東京音楽学校と海軍軍楽隊があるが,大正時代からはこれらに東洋音楽学校が加わるようになった。この両者に共通しているのは,東京音楽学校外国人教師であるユンケルやヴェルクマイスターが指導者として関与していたことである。海軍楽長が明治末からユンケルに指揮の教えを受けていたことは1.3の⑤瀬戸口藤吉の学習履歴で述べたが,1917(大正6)年には東京音楽学校管弦楽団への演奏協力が宮内省楽人に代わって海軍軍楽隊が担当するようになり(堀内1968:123-124),海軍は昭和時代に至るまで東京音楽学校の外国人指揮者を見て学ぶ機会が継続する。一方,陸軍戸山学校軍楽隊は1908(明治41)年から宮内省雅楽部から伶人(多忠基・蘭広虎・多忠告)を招いて弦楽の学習を開始し(大森1986:85),海軍同様オーケストラ化していくものの,前述の通り大正年間に宮内省の東京音楽学校への関与がなくなるので,この時期の陸軍はオーケストラ指揮法の主要な学習先になることがなかったと考えられる。

なお,2.4「在日外国人指揮者」が大正時代以降の新たな学習先として加えられるが,ここに至って初めて楽器演奏の専門家ではない純粋な職業指揮者が日本でポストを得るようになった。しかし,ここから育つ日本人指揮者は昭和時代を待たねばならなかった。

大正時代に台頭した指揮者には,海外での顕著な指揮業績が認められる東京音楽学校系統の山田耕筰と近衛秀麿がまず挙げられ,日本の職業オーケストラ創設に尽力しつつ主要な指揮者となった。彼らに共通しているのは,東京音楽学校でユンケルらの指導を受けた他に,渡欧中に職業指揮者の指揮を観察学習し,最初の顕著な指揮業績を成した点である。山田は歴史的な一流の指揮者たちの指揮を観察しており(山田1923:76,山田耕筰1935:235),近衛は「従来一般」の指揮法とニキシユ以降の「新独逸の手法」を報告している(近衛1930:141-150)。

なお,大正時代末に来日した外国人指揮者(指導者)たちの指揮のレベルについてだが,ラスカは歌劇場指揮者として立派な経歴が見て取れるものの,関西の宝塚交響楽団の指揮者としてはさほど高い評価がなされていなかったようである(徳永1999:71)。さらに,ラスカ来日の翌年に東京音楽学校に着任したクローンの指揮で当時演奏した学生は,「氏の指揮が相当以上に遅いテンポで,雄大,壮麗な楽曲をエンヤラ々と終り迄重さうに引張って行つたと言ふ感じがした」(東京藝術大学百年史編集委員会2003:1223)と回想している。したがって,明治時代に引き続き,西洋でキャリアのある外国人とい

えども、指揮者としての能力的にはまだ大きな個人差があった時期であったと考えられる。

ところで、大正時代の日本においては、いわゆるクラシック音楽を主とする常設の職業的な交響楽団が複数あったわけではなく、これは山田と近衛らが自ら切り開いて指揮者としての立ち位置を確保した演奏分野といえる。それゆえに他の指揮者が活躍した場というのは、海軍軍楽隊（吹奏楽/オーケストラ）、軽歌劇等を主演目とする浅草オペラや少女歌劇等のオーケストラ、百貨店附属の音楽隊等であった。なお、浅草オペラの指揮者の履歴を有する3名が東洋音楽学校出身者という特徴がある一方で、東京音楽学校に演奏協力しつつ学べた海軍楽長は交響楽団の指揮をする者が出ている。この他、小劇場や活動写真館にも指揮者や楽長と名の付く人たちがいたが、履歴情報が不明ないしは断片的ゆえにあまねく情報を網羅するには至らなかった。

3 昭和時代の指揮者

戦前の昭和時代の指揮の主要な学習先は「東京音楽学校」「海軍軍楽隊」「在日外国人指揮者」「その他の伝承・継承経路」である。第1章以降と同様に履歴を確認する。

3.1 東京音楽学校の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1928（昭和3）年、内田元（1903-1948）、東京シンフォニーオーケストラを主宰し指揮者となる（堀内1968：220、上原1988：293）。1935（昭和15）年大阪ラヂオオーケストラ（JOBK管弦楽団）の専属指揮者となる（西村2015：13、細川他2008：108）。1941（昭和16）年大阪放送交響楽団としての同団も指揮（西村2015：14）。**学習履歴**：東京音楽学校に学び、山井基清、クロン、ケーニヒ、山田耕筰らに師事。

② 1931（昭和5）年、プリングスハイム（Pringheim, Klaus 1883 ドイツ-1972 日本）、東京音楽学校雇外国人教師となる。同校管弦楽部の他、新交響楽団、東京室内交響楽団を指揮し（酒井2021）、マーラーやR・シュトラウスその等の曲の日本初演も行った。1937（昭和12）年バンコクの王立芸術院に移るも1939（昭和14）年再来日して教育と演奏の両面で指導的役割を担い（村田1982b：295-296）、松竹交響楽団の指揮もした（大森1986：255）。**履歴**：1905年ミュンヘン大学卒業。音楽理論をルートヴィヒ・トゥイレに学ぶ。1906年マーラー監督のウィーン宮廷歌劇場副指揮者となる。その後多くの劇場の音楽監督・指揮者を歴任。1923年から翌年にかけてベルリン・フィルハーモニーを指揮してマーラーの交響曲と管弦楽付き歌曲の全曲を指揮（東京芸術大学百年史編集委員会2003：1239）。

③ 1936（昭和11）年、大塚淳（1885-1945）、新交響楽団を指揮。1938（昭和13）年満州の新京交響楽団の指揮者となりプロ化後の新京音楽団も指揮（岩野1999：172、209-234）。**学習履歴**：東京音楽学校でヴァイオリンをユンケルに師事。1909（明治42）年同校「授業補助」（東京芸術大学百年史編集委員会1987：7、534）。

④ 1938（昭和13）年、フェルマー（1908 ドイツ-1977 ドイツ）、東京音楽学校雇外国人教師となる（ハンス・シュヴィーガーの後任）。1940（昭和15）年新交響楽団を指揮。1942（昭和17）年海軍軍楽隊東京分遣隊教務嘱託となり、戦後指揮者となる渡邊暁雄（1919-1990）に指揮を教えた。**履歴**：1928年ザクセン国立管弦楽学校卒業。ワイマール市ドイツ国民劇場副指揮者を経て1933年同劇場楽長およびアルテンブルク市劇場指揮者となる（東京芸術大学百年史編集委員会2003：1273、東京芸術大学未来創造継承センター大学史資料室2020、NHK交響楽団2014）。

⑤ 1939（昭和14）年、グルリット（Gurlitt, Manfred 1890 ドイツ-1972 日本）、中央交響楽団（1941年東京交響楽団）指揮者および東京音楽学校講師となる。戦後指揮者渡邊暁雄（1919-1990）に指揮を教えた。**履歴**：ベルリンのクリントヴォルド・シュエルヴェンカ音楽院でフンパーディンクに作曲を、カール・ムックに指揮を学ぶ。1908年ベルリン宮廷歌劇場副指揮者。1911年以降ドイツ各地の劇場指揮者を歴任。1924年ベルリン国立歌劇場を指揮。ベルリン音楽大学で教える。1933年ナチスに解雇され欧州各地で活躍後に来日（東京芸術大学百年史編集委員会2003：1281、長谷2021：67-68、村田1982a：595）。

⑥ 1934（昭和9）年、宮原禎次（1899-1976）、宝塚歌劇団で作曲・指揮する。1926（昭和元）～1934（昭和9）年広島放送局オーケストラを指揮。1939（昭和14）年新交響楽団を指揮。同年大阪放送交響楽団指揮者となる。**学習履歴**：1923（大正12）年東京音楽学校甲種師範科卒業。1931（昭和）6年ベルリン留学。（日外アソシエーツ2004：2472、NHK交響楽団2014、西村2015：13-14）

⑦ 1943（昭和18）年、金子登（1911-1987）、東京交響楽団常任指揮者となる。**学習履歴**：1930（昭和5）年東京音楽学校入学年までいたラウトルuppの指揮を観察した（東京芸術大学百年史編集委員会2003：1506）。1937（昭和12）年東京音楽学校ピアノ科卒業。1936（昭和16）年同校研究科修了後1937（昭和17）年聴講科で指揮を学ぶ。学外でローゼンストックに師事。1938（昭和13）年コンセール・ポピュレールを指揮（村田1982a：767）。

⑧ 1942（昭和17）年、山田一雄（和男）（1912-1991）、

日本交響楽団専任指揮者となる。**【学習履歴】**：1935（昭和10）年東京音楽学校卒業。在学中作曲をプリングスハイムに師事。その後指揮をローゼンストックに師事。1940（昭和15）年第9回音楽コンクール作曲部門で指揮者デビューし翌年新交響楽団補助指揮者となる。1945年満州にて新京音楽団を指揮（柴田1995c：527-528）。

3.2 海軍軍楽隊の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1932（昭和7）年、中川榮三（1896-?）、宝塚交響楽団を指揮（根岸1998：10）。1936（昭和11）年日本放送交響楽団を指揮（1936年12月28日東京日日新聞p.5）。

【学習履歴】：海軍軍楽隊出身。宝塚新設時のヴァイオリン奏者を経てウィーンに留学。帰国後に宝塚で指揮や作曲を行った（細川他2008：163）。

② 1933（昭和8）年、福喜多鎮雄（?-1972）、大阪ラヂオオーケストラ指揮者（洋楽主任）となる（西村2015：12）。**【学習履歴】**：戦時歌謡の作曲作品もある元海軍軍楽隊楽長（昭和7年10月17日東京市主催海軍軍楽隊の「福喜多楽長送別演奏会」プログラム写真を筆者保有）。

3.3 在日外国人指揮者の伝承・継承系統にいる指揮者

① 1936年（昭和11）年、ローゼンストック（Rosenstock, Josef 1895 ポーランド -1985 アメリカ）、新交響楽団常任指揮者となる。1942（昭和17年）ないし翌年松竹交響楽団を指揮（大森1986：161, 255）。戦後指揮者となる渡邊暁雄（1919-1990）に指揮を教えた。**【履歴】**：クラクフ音楽院で学んだ後1920年ウィーン音楽院を卒業。同年ベルリン音楽大学オペラ科及び作曲科教授となる。1922年ダルムシュタット交響楽団首席指揮者、1925年ヴィースバーデン国立劇場、1929年メトロポリタン歌劇場指揮者を歴任して1930年マンハイム国立歌劇場音楽総監となる。1933年ベルリンのユダヤ文化協会の音楽監督を経て1936（昭和11）年来日（村田1982b：367, 武内1995：565）。

② 1938（昭和13）年、小船幸次郎（1907-1982年）、ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団、ヘルシンキ放送管弦楽団を指揮（放送あり）。帰国後は新交響楽団や松竹交響楽団等を指揮。1943（昭和18）年満州の新京交響楽団指揮者となる。**【学習履歴】**：15歳で指揮法を独学。1928年自作合唱曲を指路教会で指揮。同年横浜マンドリン倶楽部で指揮し年末に横浜交響楽団を創立。1937（昭和12）年NHK第2回管弦楽曲懸賞第3位を経てローゼンストックに指揮を師事。その他の作曲コンクール第1位等を経て1939（昭和14）年サンタ・チェチリア音楽学校指揮完成科に1年留学し、ベルナル

ディーノ・モリナーリから指揮を学ぶ（細川他2008：283-284, 横浜交響楽団2023）。

③ 1938（昭和13）年、朝比奈隆（1908-2001）、大阪ラヂオオーケストラを指揮（西村2015：17）。1939（昭和14）年新交響楽団、1941（昭和16）年大阪放送交響楽団を指揮し翌年同団専属指揮者（柴田他1995a：109, 西村2015：14, 17）。1943年上海交響楽団、1944年新京音楽団、ハルビン交響楽団を指揮（岩野1999：302-309）。**【学習履歴】**：1933（昭和8）年メッテルに師事。

④ 1940（昭和15）年、坂本良隆（1898-1968）、新交響楽団を指揮。**【学習履歴】**：1921（大正10）年ドイツに留学し1925（大正14）年ベルリン音楽大学指揮科卒。ヒンデミット等に師事（細川他2008：306）。

3.4 その他の伝承・継承経路にいる指揮者

① 1933（昭和8）年、紙恭輔（1902-1981）、コロナ・オーケストラで《ラプソディー・イン・ブルー》等を指揮（上原1988：293）。松竹歌劇団楽長を経て1937（昭和12）年松竹歌劇団総指揮者。**【学習履歴】**：中学生時より多数の管打楽器を習得し、高校在学中マンドリンオーケストラで指揮を担当。1925（大正15）年東京帝国大学在学中に日露交歓管弦楽演奏会奏者として山田耕筰の知遇を得て日本交響楽協会創立時の奏者となる。翌年帝大卒業後も山田から音楽理論や作曲を学ぶ。1929（昭和4）年日本コロムビアが組織したジャズバンド指揮者を経て南カリフォルニア大学留学（細川他2008：200, 青山2023）。

② 1928（昭和3）年、山本直忠（1904-1965）、新交響楽団を指揮。1935（昭和10）年名古屋交響楽団で歌劇《カルメン》を指揮。**【学習履歴】**：中学生の頃から近衛秀麿、山田耕筰に師事。その後1922（大正11）年ドイツ留学で作曲等の個人教授を受け、1924（大正13）年ライプツィヒ音楽院に入学してホッホコフラー（Hochkofler, Max 1886-1972）から指揮を学ぶ。1925（他司法14）年ゲヴァントハウス合唱団員としてフルトヴェングラーの指揮で歌う（細川他2008：717-718, 長谷他2021：55）。

③ 1928（昭和3）年、斎藤秀雄（1902-1974）、新交響楽団を指揮。1942（昭和17）年松竹交響楽団、1943（昭和18）年日本放送交響楽団、1945（昭和20）年東京交響楽団等の指揮者を歴任。**【学習履歴】**：中学生の頃に民間のマンドリン団体を指揮。1918（大正7）年多基永にチェロを師事。1923（大正12）年近衛秀麿とドイツに留学しライプツィヒ音楽院でチェロを学ぶ。往路の船上で指揮を近衛秀麿から深く学ぶ。新交響楽団奏者を経て上部の年に指揮。その後再渡欧してベルリン高等音楽院でチェロを学ぶ。帰国後1936（昭和11）年以降ローゼ

ンストックに指揮を師事（細川他 2008：301，大野 2006：105）。

④ 1933（昭和 8）年，大澤壽人（1907-1953），ボストン交響楽団で自作を指揮。1935（昭和 10）年「仏日交響音楽会」を開催してパリのコンセール・パドゥルー管弦楽団を指揮し高く評価される。帰国後の 1936（昭和 11）年大阪放送交響楽団，1937 年宝塚交響楽団，新交響楽団 / 日本放送交響楽団を指揮。**学習履歴**：青少年期からロシア歌劇団，カービ・イタリア歌劇団などの巡業オペラ公演を観劇。1925（大正 14）年ラスカから関西学院で合唱指導を数回受け，その約 3 か月後に同校グリーンクラブで合唱指揮を開始。日露交歓交響管絃楽演奏会で山田耕筰と近衛秀麿の指揮を観る。1926（昭和元）年ラスカ指揮の宝塚交響楽団演奏会に通う。1928（昭和 3）年神戸オラトリオ協会創立し合唱指揮者となる。1930（昭和 5）年ボストン大学留学で作曲を学びつつ翌年宗教音楽専門 H・オーガスティン・スミス教授から指揮も学ぶ。米国ではトスカニーニ指揮のニューヨークフィルハーモニック等，英国ではトーマス・ビーチャムやピエール・モントゥー等の演奏会で感銘を受ける（生島 2017）。

⑤ 1934（昭和 9）年，貴志康一（1909-1937），ウーファ交響楽団とベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（放送），翌年ベルリン放送管弦楽団で自作を指揮。同年再度ベルリン・フィルハーモニーを指揮（レコード録音）。同年帰朝演奏会では大阪放送管弦楽団と新交響楽団を指揮。1936（昭和 11）年以降新交響楽団を度々指揮。宝塚交響楽団も指揮。**学習履歴**：1923（大正 12）年ラスカに音楽理論を学ぶ。1928（昭和 3）年ジュネーヴ国立音楽学校卒業前後にモントルー管弦楽団演奏会に 3 回出演。その後ベルリン高等音楽学校に入学。1930（昭和 5）年近衛秀麿指揮の新交響楽団で 3 回独奏。1931（昭和 6）年フルトヴェングラーに指揮法を学ぶ（日下 2001：123-129）。

⑥ 1936（昭和 11）年，服部正（1908-2008），新交響楽団を指揮。1937（昭和 12）年コンセール・ポピュレール（後の青年日本交響楽団）を創設して指揮。**学習履歴**：慶應義塾大学マンドリンクラブの指揮者を経て 1929（昭和 4）年オーケストラ・シンフォニカ・タケイの作曲コンクールに入賞。1932（昭和 7）年帝国音楽学校や東京高等音楽学院で教えつつ作曲活動を続け，1935（昭和 10）年毎日音楽コンクール作曲部門第 2 位受賞。その後近衛秀麿の下で新交響楽団の放送指揮の担当を経て上部の年に新響演奏会の指揮をした（細川他 2008：525-526）。

⑦ 1938（昭和 13）年，尾高尚忠（1911-1951），ウィーン交響楽団を指揮。その後ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団も指揮。1941（昭和 16）年新交響楽団を指揮（翌

年常任指揮者）。**学習履歴**：旧制高校中退して 1931 年ウィーン音楽院に留学。帰国後プリングスハイムから作曲を学ぶ。1934 年再渡欧してウィーン音楽院マスタークラスで作曲を学ぶ他指揮をヴァインガルトナーに学ぶ。（柴田他 1995b：421，細川 2008：173-174）。

3.5 昭和時代における日本人指揮者の指揮学習の特徴

戦前の昭和時代の特徴は，大正期には見られない様々な学習経路が確認できた。マンドリン合奏指導者出身の小船幸次郎や紙恭輔，服部正，音楽学校や軍楽隊を経ずに留学先で指揮して成功した大澤壽人や貴志康一，尾高尚忠。日本人の近衛秀麿から親しく学んだ斎藤秀雄などである。そして，大正時代末に着任したラウトルップを始めとする在日外国人の職業指揮者が昭和の戦争末期前まではほぼ絶えることなくおり，大塚淳から山田一雄に至るまでの昭和の日本人指揮者が何人か育った。さらに同時期には音楽学校外においては，個人的に日本人指揮学習者への教育に貢献した在日外国人職業指揮者としてラスカやケーニヒ，メッテル，ローゼンストックなどがいた。

以上のように，日本で指揮者を志す者がその専門的な教育を受ける機会や場が従前に比して格段に増えたといえる。その結果，いきなり留学してヴァインガルトナーから指揮を学んだ尾高は帰国後に指揮者となったが，地方都市でありながらも留学前に外国人職業指揮者から学ぶことができた大澤と貴志については，留学先の一流オーケストラを指揮してすぐさま大成功を収めた。彼らの業績は戦前の昭和時代における学校や社会を含む音楽教育環境とその水準の上昇をも示唆するものであろう。

結

明治当初の洋楽受容は軍楽から開始され，指揮法は軍楽隊に一日の長があった。しかし宮内省や音楽取調掛でも洋楽演奏に乗り出し，各省庁間の緊密な連携協力の下，指揮法も含めて外国人指導者から学ぶところが大きかった様子であった。この時期に日本人で指揮し始めたのは軍楽長や宮内省伶人などであった。ただし，文部省側はメーソンを始めとする弦楽演奏可能な外国人教師を雇い続けたので，殊に東京音楽学校となって以降は一流の弦楽器奏者指導の下でオーケストラ教育が進み，明治時代末には海軍が指揮法も含めて同校に学びにくるようになった。この教育力を背景にして大正時代には同校を経て欧州で指揮を見て学んで成功した山田耕筰や近衛秀麿が出てきた。また大正時代以降は音楽学校内外で在日外国人の職業指揮者が活躍するようになり，専門的なオーケストラ教育の環境が昭和に向けて整っていった。この背景には，指揮者の需要が同時代に増大したことが考え

られる。演奏媒体としての交響楽団は東京音楽学校の他は1つ程度であったが、浅草オペラや少女歌劇、活動写真館などの小規模な楽団は多数出現し、同時代末にはラジオ放送の需要も生じて指揮者の裾野が広がっていった様子であった。なお、交響楽団の指揮者となった日本人は国内国外を問わず外国人の職業指揮者から学んだ作曲家が多かった。しかし、昭和に入るや朝比奈隆のように純粹に指揮能力だけで台頭していった指揮者が出現し、そこに作曲家と指揮者の分化がみてとれる。

なお、この分化は指揮が専門的で高度な演奏技術と見なされるようになってきた、つまり、指揮法の歴史的発達が発達が最終段階に達したことの結果現象である可能性が高い。この点、ラウトルuppに指揮法を2年間師事した橋本國彦(1904-1949)は、「在来法は曲節の始終が不明瞭で不自然性のあることから、最近デンマーク人ラウトルupp氏に依って或る定点を置くの方法が紹介されてゐる」とし(福井県下聯合教育研究会1935:32)、別の報告では東京音楽学校で「ピチカートが合うようになったのはローゼンシュトックが来てから」とのことで、「〈大体〉から〈きっちり〉への」転換期だったという(東京藝術大学百年史編集委員会2003:1506)。この時期に在日外国人の職業指揮者に師事した日本人指揮者について、満州の新京音楽団員は「それまで大塚さんと坂西さんの指揮しか知らなかった我々の演奏が、小船さんの指揮でコロッと変わってしまったんです」とか、「とにかく朝比奈さんの棒はわかりやすかった」(岩野1999:291,308)と回想し、昭和時代の学習者の技術の高さを示唆している。

このように指揮法が発達する過程において、日本人はこの時間軸の中で可能な限りの機会を捉えて学び、昭和時代に向かって指揮技術を向上させていったと考えられる。ただし、大正時代以降はそれまでとは事情が異なる。第一次世界大戦、ロシア革命、ナチスドイツのユダヤ人迫害等の諸事情から、欧州の一流の指揮者が幾人も来日し、殊に昭和時代には非常にレベルの高い指揮法学習の機会が現出していたのである。この世界的に稀な国内の学習環境が、留学した先で一流オーケストラを指揮して成功したり、あるいは、留学することなく職業指揮者として頭角を現す日本人指揮者を誕生させたと考えられる。

文献表

青山誠 2023「笠置シヅ子と服部良一の出会いは運命だった」『プレジデント・オンライン』(2023/11/17) 東京：プレジデント、インターネット [https://president.jp/articles/-/75800#goog_rewarded] 2023年12月3日閲覧。
秋山龍英 1966『日本の洋楽百年史』東京：第一法規出版。

生島美紀子 2017『天才作曲家 大澤壽人 駆けめぐるポストン・パリ・日本』東京：みすず書房。
伊澤修二 1971『洋楽事始 音楽取調掛成績申報書』山住正巳校注、東京：平凡社。
石原慎司 2021「ドイツから戦前の日本にもたらされたオーケストラの音楽表現—ルドルフ・フェッチの指揮法講義(昭和15年度)から—」『音楽表現学』19, 日本音楽表現学会, pp.13-22。
岩野裕一 1999『王道楽土の交響楽 満州—知られざる音楽史』東京：音楽之友社。
上原一馬 1988『日本音楽教育文化史』東京：音楽之友社。
内田晃一 1976『日本のジャズ史 戦前・戦後』東京：スイング・ジャーナル。
NHK 交響楽団 2014「演奏会記録」インターネット [http://www.nhkso.or.jp/library/archive/index.php] 2023年11月28日閲覧。
大野芳 2006『近衛秀麿—日本のオーケストラをつくった男』東京：講談社。
大森盛太郎 1986『日本の洋楽 I』東京：新門出版社。
岡野弁 1995『メッテル先生』東京：リットーミュージック。
九州大学広報室 2018『PRESS RELEASE』(2018/12/07), 九州大学。
近代日本社会運動史人物大事典編集委員会 [編] 1997『近代日本社会運動史人物大事典 3』東京：日外アソシエーツ。
日下徳一 2001『貴志康一 よみがえる夭折の天才』東京：音楽之友社。
近衛秀麿 1930『音楽随筆 シェーネベルグ日記』東京：一進堂書店。
後藤暢子 2014『山田耕筰—作るのではなく生む—』東京：ミネルヴァ書房。
酒井健太郎 2021「クラウス・プリングスハイム(1883-1972)が関与した日本での公演の調査」『音楽芸術運営研究』15, 昭和音楽大学アートマネジメント研究所, pp.81-102。
柴田南雄・遠山一行 [監] 1995a『ニューグローブ世界音楽大事典 第1巻』東京：講談社。
柴田南雄・遠山一行 [監] 1995b『ニューグローブ世界音楽大事典 第3巻』東京：講談社。
柴田南雄・遠山一行 [監] 1995c『ニューグローブ世界音楽大事典 第18巻』東京：講談社。
杉本貴志 2019「大阪におけるオーケストラ—20世紀中盤までの社会における歩み」『関西大学なにわ大阪研究』1, 関西大学なにわ大阪研究センター, pp.3-29。
武石みどり 2006「ハタノ・オーケストラの実態と功績」『徳丸吉彦先生古稀記念論文集』(お茶の水音楽論集特別号) お茶の水音楽研究会, pp.363-373。
武石みどり [監] 2007『音楽教育の礎 鈴木米次郎と東洋音楽学校』東京：春秋社。
武石みどり 2022「大正～昭和初年代の映画館の音楽と楽士—管弦楽普及の過程—」『東京音楽大学研究紀要』45, 東京音楽大学, pp.1-21。
武内博 [編] 1995『来日西洋人名事典』(増補改訂普及版)

- 東京：日外アソシエーツ。
- 玉川裕子 2007 「西洋・日本・アジア—三越百貨店の音楽活動にみる音楽文化の西洋化と国民意識の形成—」『ドイツ文学』132, 日本独文学会, pp.78-98.
- 東京藝術大学百年史編集委員会 [編] 1987 『東京芸術大学百年史：東京音楽学校篇第一巻』東京：音楽之友社。
- 東京藝術大学百年史編集委員会 [編] 2003 『東京芸術大学百年史：東京音楽学校篇第二巻』東京：音楽之友社。
- 東京藝術大学未来創造継承センター大学史資料室 2020 「音楽取調掛と東京音楽学校の外国人教師たち」インターネット [https://archives.geidai.ac.jp/contents/1-2/] (2023年11月2日閲覧)
- 塚原康子 2001 「軍楽隊と戦前の大衆音楽」『プラスバンドの社会史』東京：青弓社, pp.83-124.
- 塚原康子・平高典子 2011 「海軍軍楽長・吉本光蔵のベルリン留学日記」『東京藝術大学音楽学部紀要』37, 東京藝術大学音楽学部, pp. 43-60.
- 塚原康子 2022 「近代日本の軍楽隊研究」(科研費 2021 年度実施状況報告書), インターネット [https://kaken.nii.ac.jp/report/KAKENHI-PROJECT-21K00127/21K001272021hokoku/] (2023年11月24日閲覧)。
- 徳永高志 1999 「戦前日本オーケストラの一運営—宝塚交響楽団を例に—」『文化経済学』1 (4), 文化経済学会, pp.61-81.
- 中村理平 1993 『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』東京：刀水書房。
- 西村理 2015 「戦前・戦中におけるJOBKの放送オーケストラ—番組制作の観点から—」『大阪音楽大学研究紀要』53, 大阪音楽大学, pp.7-22.
- 日外アソシエーツ [編] 1998 『芸能人物事典：明治大正昭和』東京：日外アソシエーツ。
- 日外アソシエーツ [編] 2004 『20世紀日本人名事典』東京：日外アソシエーツ。
- 根岸一美 1998 「ヨーゼフ・ラスカ (1886～1964) と宝塚交響楽」『待兼山論叢 美学篇』32, 大阪大学, p.1-20.
- 野原泰子 2022 「日露交歓交響管弦楽演奏会—山田耕筰の交響楽運動とロシア音楽界の繋がりを探る—」『武蔵野音楽大学研究紀要』53, 武蔵野音楽大学, pp.91-116.
- 長谷義隆・丹羽秀雄 2021 『発掘レトロ洋楽館 松坂屋少年音楽隊楽士の軌跡』四日市市：「レトロ洋楽館」刊行委員会。
- 福井県下聯合教育研究会 [編] 1935 『小学校に於ける唱歌教育の実際的研究』福井市：勝木書店。
- 藤田由之 [編] 2014 『近衛秀麿の遺産』東京：音楽之友社。
- 細川周平・片山杜秀 [監] 2008 『日本の作曲家—近現代音楽人名事典』東京：日外アソシエーツ。
- 堀内敬三 1968 『音楽明治百年史』東京：音楽之友社。
- 堀内彩虹 2011 「貴志康一が『作曲家』になるまで—学びの過程にみるその原像」『貴志康一と音楽の近代 ベルリン・フィルを指揮した日本人』梶野絵奈他編, 東京：青弓社, pp.56-71.
- 増井啓二 1984 『日本のオペラー—明治から大正へ』東京：東京音楽社。
- 三浦俊三郎 1931 『本邦洋楽変遷史』東京：日東書院。
- 皆川弘至 2004 「『クラシック音楽文化』受容の変遷—外来演奏家によるコンサート史への一考察—」『尚美学園大学学術情報学部紀要』4, 尚美学園大学, pp.71-164.
- 村田武雄 [監] 1982a 『演奏家大事典 第I巻』東京：音楽鑑賞教育振興会。
- 村田武雄 [監] 1982b 『演奏家大事典 第II巻』東京：音楽鑑賞教育振興会。
- 林淑姫 2018 「徳川頼貞と明治のオーケストラ—東京音楽学校演奏会を中心に」(南葵音楽文庫ミニレクチャー資料) インターネット [https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/minilec/pdf/2018_05_05minilecNo21.pdf] (2023年11月11日閲覧)
- 山田耕筰 1923 「リヒアルト・シトラウスの印象」『詩と音楽』2 (3), 東京：アルス, pp.68-80.
- 山田耕筰 1935 『耕筰楽話』東京：清和書店。
- 横浜交響楽団 2023 「創立者・指揮者・作曲家 小船幸次郎」インターネット [https://yokokyo.net/conductors/Kobune_Kojiro.html] 2023年11月4日閲覧。
- Fastl, Christian 2022 “Laska, Familie” Oesterreichisches Musiklexikon online, インターネット [https://www.musiklexikon.ac.at/ml/musik_L/Laska_Familie.xml] 2023年11月16日閲覧。